



純文学連載小説



葉唐辛子はじめ

第一章 ロボット

そのロボットがひとと会話できるように

烏丸博士は午後の間中古い家具が並んだ静かな書斎で、コーヒーカップを片手に考えを巡らせていた

ひとが言葉をしゃべるとはどういうことか

彼にとって相手の言葉がわかるとは

一言ひとこと教えても

その灰色の金属の箱のなかの相手には、意味がわからない

「彼には命がないからだ」・・・

博士はため息をついた

窓から川べりの、街路樹の葉が見える

パパママから

生きるとはどういうことか

最初の一歩から

子供が覚えるように

教えてゆく

そうやって

巨大な言葉と意味の体系を

コンピューターに

組み入れていった

長い年月が流れた

生きるという意味の細分化

そうやって我々は生きている

アメーバがだんだん物を覚え

触手をのばしてゆく

コンピューターが会話をするようになった

まるで生きているように

だがそれは

博士の人生の

影にすぎない

彼の会話の

ひとつひとつを回路にしたのは

博士の頭の中にあった博士の人生だ

そいつは博士のパートナーになった

だが

スイッチをきると

とまってしまう

そういう命だ